

愛知支部

2014 年度行事報告：「秋の遠足」（絶滅危惧種レクチャーツアー）について

朝起きてカーテンを開け、差し込む朝日にホッとしました。9時半、東山動物園正面玄関に21名が集合しました。10時から、絶滅危惧種レクチャーツアーの始まりです。講師は、長く東山動物園に獣医として勤め、定年退職後の今はボランティアガイドなどをなさっている松山國臣様です。

なじみのある動物の多くが、絶滅危惧種に指定されていることに驚きます。動物を取り巻く生育環境の変化は、地球規模の気候変動だけでなく、人間の都合によって引き起こされる変化もたくさんあります。

世界各地の内乱は、より多くの人々が武器を手にして、動物が殺されやすくなってしまいます。インドサイの激滅の理由は、オイルマネーで潤った中東の人たちが、インドサイの角でできた剣の鞘を求めようになったこと。日本でも、戦争中の動物園のゾウが餓死させられ、生き残って終戦を迎えたのは東山動物園の2頭だけだったこと等々。人間社会の事情によって、運命が左右される動物たちです。

昭和12年に開園した東山動物園は、ライオンやキリンなどを、檻に入れずに堀を巡らして見学させるという、当時としては先進的な取り組みでした。奥のライオンが借景となるように手前の低いところにいくつかの動物を配置して、下から眺めるとサバンナの風景がかもし出されるように設計したこと。遊歩道に設けた木を模した柵は、今なら型にはめて同じものをいくつも作るのですが、当時は左官さんが一つ一つ作ったということ。飼育員や獣医さんだけでなく、多くの専門家が、知恵と努力と愛情を傾けて築いた動物園でした。

ガイドの松山様に説明していただいたのは、インドサイ、マレーバク、アジアゾウ、ソマリノロバ、ライオン、トラ、クマでしたが、それぞれにたくさんの物語をもっています。「目から鱗」の連続です。動物園すべての動物が抱える物語はどれほどかと想像するとき、動物園は無数の玉手箱に思えました。

90分のレクチャーツアーで、ほどよく歩き疲れたころお昼となり、東山タワーの上から名古屋の街を眺めながら、バイキングの昼食となりました。昼食後は自由に見学、3時近くに北園門近くのカフェに再集合、お茶を飲みながら交流を深め、4時に散会となりました。

いま、行きたいところへは、マイカーで気軽に出かけられます。電話1本で簡単に参加できる1日バスツアーは溢れています。内容はバラエティに富み、しかも、お安い。そのようななかで、桜蔭会ならではの遠足とは……と考えて、次年度も今年に負けない楽しい遠足を企画したいと思います。

(昭53地 磯前睦子)



見学風景



カピバラ